

576

癌性胸膜炎に対する胸腔内免疫化学療法例の臨床的検討

国立療養所再春荘病院外科

○岩崎健資, 立神高明, 坂本泰雄

目的：癌性胸膜炎は放置すれば胸水貯溜によって、呼吸困難を惹起するし、局所免疫化学療法にも限度がある。外科で経験する症例は E_0 例が多く、局所療法で胸膜癒着を計った後、集学的治療につなぐ訳であるが、それでも最長2.5年の生存しか得られなかった。臨床的検討を加え、本法の利点を考える。

対象：昭和55年から63年までの8年間に16例の癌性胸膜炎に対し、CTD+局所免疫化学療法を行ない、うち8例では原発巣の葉切を実施した。男女比は6:10。年齢は50歳から82歳で、平均66歳。原発性肺癌14例と乳癌2例である。診断は手術時散布巣11例と胸水細胞診5例であった。組織型は肺腺癌13例、肺扁平癌1例と乳腺癌2例であった。局所療法はMMC+N-CWS群7例、ADM+OK₄₃₂群8例とBAI群1例であった。

結果：平均生存期間は全体では1.6年で、葉切群8例では1.9年、試験開胸群3例では1.8年であった。最長生存期間は2.5年で、最短は0.5年であった。平均生存期間は D_1 群では2.0年、 D_2 群では1.6年、 E_0 群では1.8年、 E_2 群では0.8年であった。

利点：1.胸水貯溜群では呼吸困難が解消された。2.栄養の改善、3約1カ月で通院可能となった。4.集学的治療、照射、化学療法などが可能となった。

578

癌性胸膜炎の治療成績の検討

浜松医科大学 第一外科¹, 第二内科²○野木村宏¹, 堀口倫博¹, 鈴木一也¹, 原田幸雄¹, 佐藤篤彦²

原発巣切除後の癌の肺転移のうち、胃癌と乳癌は癌性胸膜炎の形をとることが多いといわれている。これらの癌性胸膜炎に肺癌術後の癌性胸膜炎を加えて、当科での治療成績をまとめた。

1988年6月までに当科で治療された、胃切後癌性胸膜炎13例、乳切後癌性胸膜炎18例、肺切後癌性胸膜炎5例を対象とし、原発巣切除手術から胸水発現までの期間、胸水発現からの予後、等を比較検討した。

胃切後症例では、切除胃の病理検索でv(-)群とv(+)群とで、胸水発現までの期間に差があったが、胸水発現からの予後に差は無く、殆んどが3ヶ月未満で進行が早かった。

乳切後症例では、術後の補助療法への反応性によって胸水発現までの期間は影響を受けて、5年以上のものと1年以内のものが各々三分の一つつあり、胸水発現からの予後もそれからの治療への反応性に左右される傾向があり、1年以上のものと3ヶ月未満のものが各々三分の一つつあった。

肺切後症例では、対象例数が少なかったが、胸水発現までの期間は胃切後症例のv(+)群と大差は無いが、胸水発現からの予後は胃切後症例より良い印象を受けた。

577

癌性胸膜炎症例の検討

金沢大学第一外科

○吉田政之、渡辺洋宇、清水淳三、村上真也、小田 誠、山村浩然、村上 望、森田克哉、岩 喬

癌性胸膜炎の胸水に対する免疫化学療法剤の胸腔内投与の目的は、胸膜癌細胞への殺細胞効果と、胸膜刺激作用による癒着促進により、胸水の産生および貯溜を抑制することにある。今回、我々は、癌性胸膜炎で胸腔内にADMとOK-432を注入した症例を検討し、良好な治療効果が得られたので報告する。

(対象と方法)対象は1984年から1988年までに、当科で経験した癌性胸膜炎症例19例で、内訳は、肺癌9例(腺癌5例、扁平上皮癌2例、大細胞癌2例)、胸膜中皮腫1例、悪性胸腺腫1例、乳癌1例、大腸癌1例、その他6例であった。方法は、まずTube Thoracotomyを施行し、胸腔内にADMを30~50mg注入した。これを1日の胸水量が100ml以下になるまで反復し、この時点でOK-432を5~10KE注入して胸水貯溜が消失したら胸腔ドレーンを抜去した。効果判定は、日本肺癌学会の癌性胸水に対する効果判定基準を用いた。

(結果)ADM注入回数は1~5(平均1.9)回、OK-432注入回数は0~3(平均0.9)回であった。効果判定は、著効あるいは有効が15例、無効が4例であった。

(結語)癌性胸膜炎に対するADMとOK-432の胸腔内注入療法は高い奏効率を示し、患者のQuality of lifeを高める意義は十分にあると思われる。また、最近、胸水中のリンパ球から誘導したLAK細胞の胸腔内注入を試みているが、その結果についても述べる。

579

癌性胸膜炎の治療効果と予後：肺癌と胃癌での比較

順天堂大学医学部呼吸器内科

○金光俊尚, 鈴木 勉, 家永浩樹, 岡 正彦, 高橋さつき, 瀬戸口靖弘, 瀬山邦明, 稲富恵子, 富永 滋, 貫和敏博, 吉良枝郎

<目的>原発性肺癌による癌性胸膜炎と胃癌による癌性胸膜炎の治療効果とその予後について検討を加えたので報告する。

<対象>1979年1月より88年4月までに加療した原発性肺癌による胸膜炎72例、男46例、女26例(腺癌54例、類表皮癌9例、小細胞癌6例、肺胞上皮癌2例、大細胞癌1例)と胃癌による胸膜炎48例、男29例、女19例を対象とした。化学療法は胸腔内への薬剤投与例とし、薬剤はADR, MMC, OK 432, CQ, DOTCの単独投与またはこれらの併用とした。肺癌では治療40例、非治療32例、胃癌では治療例20例、非治療例が28例であった。

<結果>初発症状から胸水確認までの期間は原発性肺癌で7ヶ月、胃癌で12ヶ月、胸水確認から死亡までの期間は肺癌で平均4.3ヶ月、胃癌で1.9ヶ月で胸水貯溜後はあきらかに胃癌で予後が悪い。また治療効果(+)の症例では胸水貯溜から死亡までがそれぞれ6ヶ月、3.5ヶ月であり癌性胸膜炎の局所治療の成否は両群で明らかに延命効果に影響していた。治療薬剤ではADRとOK 432の単独あるいは併用投与で良い治療効果が得られた。胃癌の症例では大部分の症例で腹水が先行しており、胸水確認の時点ですでに全身状態の悪化と難治性の腹水が存在し、これらが胃癌症例での癌性胸膜炎の予後不良の原因と考えられた。